Interview

# 駐日ラテンアメリカ大使インタビュー

## 第45回　メキシコ合衆国

### メルバ・プリーア駐日メキシコ大使

# 「戦略的グローバル・パートナーシップ」の進展に期待

**メキシコのプリーア駐日大使は、ラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、日本の印象、日本とメキシコの外交・経済関係、太平洋同盟、コロナ禍の中での大使としての取り組みなどについて語った。同大使は、国家先住民庁長官、外務省州・連邦連絡局長、在外メキシコ人局長、社会団体担当ユニット長、駐インドネシア大使、駐インド大使等を歴任し、2019 年 6 月から駐日特命全権大使。インタビューの一問一答は次の通り。**

**－大使は３年半余り駐日大使を務めておられますが、日本についてどのような印象をお持ちですか。これまでの日本滞在で最も印象深い思い出は何ですか。**

日本という国は、私を驚かせてやまない国です。駐日大使になる前にも、公的な用務や私的な旅行で何度も訪日し、素晴らしい名所などを訪れました。日本や日本人について語られる肯定的な評価は、すべて真実だと思います。また、日本はメキシコと同じく、古来の文化を持つ国なので、様々な生活様式を知ることができるのも、その魅力です。

日本に住んでから、自転車で日本各地を旅行しています。道すがら、素晴らしい景色を見たり、地元の人たちの温かい歓待に触れたりするのを楽しんでいます。最近、私にとって 2 回目となる四国八十八ヶ所霊場めぐりを行いました。これは間違いなく、日本での最も印象的な経験の一つです。

昨年は、日本で一番高い場所を見ようと思い、富士山に登りました。日本最北端の北海道宗谷岬や、九州最南端の鹿児島県佐多岬という日本本土の最南端などにも行きました。

また、天皇陛下の即位の礼、東京オリンピック、安倍晋三元首相の死去など、日本社会にとって歴史的に重要な出来事も経験しました。これらを通じ、日本の人々の価値観や強靭性など、様々な面を知ることができました。

**－日本と貴国は 135 年前の 1888 年に日墨修好通商航海条約が締結されて以来、経済や移民を通じ、良好な友好協力関係を築いてきました。大使はその現状をどう評価しておられますか。**

今から 400 年以上前、フィリピンから現在のメキシコに向かう船が千葉の海岸で座礁したことがきっかけで、メキシコと日本の交流が始まりました。当時、日本で初めて太平洋を渡る船が建造され、難破した船員を帰国させたことが、今日まで続く友好の端緒となりました。

今年（2023 年）は、1888 年 11 月 30 日に日本・メキシコ修好通商航海条約が締結され、外交関係が樹立されてから 135 年目にあたります。この間、両国民間の協力と交流が、共通の価値観と誠実な理解と友情に基づくものであることを、何度も確認してきました。2005 年には、日本にとって最初のすべての分野をカバーする自由貿易協定である日墨経済連携協定（EPA）締結を通じて、友好関係がより強固なものになりました。

2013年からは、両国は、「21世紀における戦略的グローバル・パートナーシップ」の下で、共通のビジョンと共通の行動を推進しています。さらに、両国は共に、2018年12月に発効した「環太平洋パートナーシップに関する包括的かつ先進的な協定（CPTPP）」に加盟しています。

両国は、政治・経済分野だけでなく、文化、教育、開発、協力、人的交流の面でも、極めて良好な関係にあります。毎年、200億ドル以上の交易を行い、二国間および多国間のフォーラムで対話し、何十万人もの国民が互いの国を訪問しています。

しかし、私たちは、複雑さと不確実性を特徴とする新たな世界秩序に入っており、それに対応して新たな二国間協力の確立が求められています。そのため、メキシコと日本は、ハイレベルでの円滑かつ継続的な政治対話を通じて、ポスト・パンデミック世界を睨んだビジョンを固めることに合意しました。

マルセロ・エブラル外相と林芳正外相は、2022年9月26日及び23年1月5日の会談を通じ、戦略的グローバル・パートナーシップの最も成功した側面を強化するとともに、協力と相互利益のための新たな行動を推進することで一致しました。二国間のパートナーシップは、広範かつ多面的ですが、世界的な新たな課題や問題のすべてに対処できているわけではありません。

両国は、技術革新、デジタル経済、その他のグローバルな問題についての協力を強化することが求められています。リチウム、バッテリー生産、ロボット、航空宇宙など、新しい最先端の経済セクターを開拓することも期待されています。

観光分野では、東京－メキシコシティ間で毎日運航を維持していたANA（全日本空輸）便に加え、2023年3月にアエロメヒコ航空が運航を再開したことにより、往来の再活性化を事業者と協力して進めています。パンデミックによる規制が解除されたことで、自国の多様な文化や観光的な魅力を幅広く広報し、食文化・料理への関心もさらに高めようとしています。

未来は若者のものです。開発協力の枠組みの下、海洋養殖、林業、プラスチック廃棄物管理、高齢者の健康などの分野で、人材育成プログラムを推進しています。また、科学とイノベーションにおける日本の強みを考慮し、農業技術、バイオテクノロジー、人工知能、グリーン産業、健康などの分野で、さらなる協力を進めています。

多様性・包括性重視の外交政策の一環として、これらすべての分野において、女性やLGBTQ+コミュニティの参加拡大を推進します。また、社会生活のあらゆる分野で、彼らの権利が十分に行使されることを支援します。

メキシコと日本の関係は、未来に向けて、現代のグローバルな重要課題に共同して対処していくための確固とした地平が拓けています。私たちは、400年以上にわたる共通の歴史が示すように、今後数十年の間にわたって、成功と相互理解の新たな章を刻むことができると確信しています。

**－今年1月初めには林外務大臣が訪墨してエブラル外務大臣やブエンロストロ経済大臣と会談し、「戦略的グローバル・パートナーシップ」や経済関係の強化について協議が行われました。これらを踏まえ、今後の両国関係の展開をどう見ておられますか。**

メキシコと日本の「戦略的グローバル・パートナーシップ」は、外交関係樹立135周年記念の枠組みの中で、林芳正外相の訪問により、将来に向けてアップデートされました。日本は、メキシコにとって世界第6位、アジア太平洋地域では第3位の貿易相手国です。また、メキシコにとって世界第4位の投資国でもあります。メキシコには1300社以上の日本企業が進出しており、メキシコの労働人材は今後の投資拡大のカギを握っています。

日本は、メキシコを食料安全保障の一翼を担う国として特別に評価しています。メキシコは、農産物の輸入先として第3位であり、最先端産業に欠かせない鉱物の輸入先でもあります。しかし、何よりも友好と信頼が、未来を見据えたこの関係の基礎となっています。

このような関係によって、日本製品はメキシコ市場だけでなく、アメリカ大陸全域に広がっていることを忘れてはなりません。

**－特に、経済関係については、2005年の日墨経済連携協定（EPA）の発効以降、貿易量は2倍、進出日系企業数は4倍と大きく発展しています。中国からのサプライチェーンの移転を含め、今後の投資拡大のためには、治安や法的安定性など、ビジネス環境の一層の整備が重要だと言われていますが、どのようにお考えですか。**

エブラル外相と林外相との会談（日本外務省ホームページより）

日墨経済連携協定（EPA）は、間違いなく二国間関係に法的確実性と計画性をもたらし、進出企業や投資は4倍に増加しました。1999年から2021年の間で、日本の対メキシコ直接投資額は約300億ドルに達し、対メキシコ外国直接投資総額の約5%を占めています。分野としては、製造業、電気、水道、ガス供給、貿易などの分野に集中しています。ロボットや航空宇宙など、新たな分野も開拓されようとしています。最近の「ニア・ショアリング（近隣国への事業拠点の移転）」については、北米の恵まれた地理的位置、USMCA（米国・メキシコ・カナダ協定）による法的保障、メキシコ人労働者の人材確保等により、かなりの割合がメキシコに向かうと確信しています。

また、両国はEPAのずっと以前から重要な経済関係にあったことも忘れてはなりません。例えば、日産自動車は1960年代初頭からメキシコに工場を開設していましたし、パナソニックやソニーなど多くの電機メーカーもEPAの締結前にメキシコに進出しています。これら企業は、メキシコの地理的位置や各種協定の利便性を利用したのです。

**―メキシコが議長国を務めた「太平洋同盟」は、最近構成国のコロンビア、ペルー、チリで政権が交代しましたが、その枠組みでの活動に変化はありませんか。特に、アジア太平洋諸国との関係はいかがですか。**

2022年にメキシコが太平洋同盟の議長国を務めたとき、その主な貢献は事業活動の年間プログラムを作成したことです。2013年からオブザーバー国となり、2019年に太平洋同盟と共同宣言に署名した日本にも、それらを提示しました。

現在の議長国ペルーのリーダーシップの下、コロンビアやチリとも緊密に連携し、太平洋同盟の総力を結集して協力プログラムが作成されることを期待しています。プラスチック製品のリサイクル・管理、持続可能なインフラ、中小企業・スタートアップ、自然災害とリスク防止、学術交流、文化・観光振興など、興味深いテーマに引き続き取り組んでいくことになります。

**―新型コロナウイルスの感染拡大により、この３年間は活動が大きく制約されたと思いますが、そのような中で駐日大使として取り組まれたこと、そして、これから取り組みたいと思っておられることは何でしょうか。**

新型コロナウイルスのパンデミックの中で、メキシコ人、日系人、日本人コミュニティとの連携を維持し、感染対策規則を遵守し、また、退屈さや孤立感を緩和する一助となることを特に重要視しました。

その意味で、2020年以降、私たちは文化的な活動を維持するため、スペイン語と日本語のデジタルコンテンツの制作と普及を優先しました。講演会、映画会、展示会の形式を、感染対策上の状況に合わせ、オンラインやデジタル、オーディオ・ビジュアル形式（Podcasts、Webinars、Facebook Live Talks、ソーシャル・ネットワークでの連続投稿など）で実施しました。

これにより、日本全国のメキシコ人コミュニティやメキシコの友人たちと継続して親交を深めることができ、さらには、メキシコからもリアルタイムでフォローし交流できるイベントができるようになりました。そして、日本人や日系ラテンアメリカ人のオーディエンスやそのキーパーソンの間でも知名度を上げることができました。

二国間関係や友好と相互理解の絆を促進し続けるために、私たちは対面式の文化活動を再開していますが、今後とも、地理的、言語的、保健的な距離を超えて親密さを保つために、デジタルやハイブリッド形式の良い面を適切な形で活用し続けていきたいと考えています。

**―『ラテンアメリカ時報』の読者に対してメッセージがあれば、お願いします。**

読者の皆様には、メキシコと在日メキシコ人に対

する関心と支援に感謝申し上げます。

併せて、私たち大使館が主催し支援するさまざまな活動について、常に最新の情報を入手していただけるようお願いいたします。私たちは、さまざまなチャンネルやスペースで情報を発信しています。私たちのソーシャル・ネットワークを通じて、セミナーに参加したり、デジタル展示会を訪れたり、地元の食材を使ったメキシコ料理の作り方を学んだり、伝統音楽や現代音楽を聴いたりするなど、きっと驚くような多くのことを発見することができるでしょう。

今年から来年にかけて、日本の3つの国立博物館で、メキシコの古代文明に関する大規模な展覧会が開催されます。特別展「古代メキシコ－マヤ、アステカ、テオティワカン」では、「赤の女王」の仮面をはじめ、140点以上もの貴重な至宝が展示されます。東京、大阪、九州で開催されるこの機会に、ぜひご覧ください。

また、ANAのデイリーフライトに加え、アエロメヒコ航空が東京－メキシコシティ間の直行便を再開し、これまで以上にメキシコへの訪問が容易になりましたので、皆様の訪問を心よりお待ちしています。旅行日程を作成される際には、日本語で情報提供しているvisitmexico.comのサイトをご活用ください。

（注）本インタビューのスペイン語全文は、ラテンアメリカ協会ホームページ英語サイトに掲載しています。

（ラテンアメリカ協会副会長　佐藤 悟）

## ラテンアメリカ参考図書案内

### 『スペインと中南米の絆 －意識しないほどの深いつながり』

**渡部 和男　彩流社**
**2023年2月　256頁　2,500円＋税　ISBN978-4-7791-2875-2**

スペインが大航海時代に到達し３世紀にわたって植民地として支配した中南米との関係を、歴史的、文化的観点から概観し、続いてスペインと中南米相互の相手に対するイメージ・意識、スペインと中南米のスペイン語の違いとその背景、さらに飲食物の由来などの文化面、コロンブスの交換と言われる新大陸からスペインに伝わったものとスペインから伝えられたもの、中南米に入ってきた人種、民族、宗教、移住、対米関係の観点、中南米の貧困の原因、債務問題までを取り上げ、最後にスペインと中南米との間の特質として人間関係と性格、ラテンアメリカ社会の特質、政権移行期、独立運動、諸内戦・戦争の場合の意思決定を両者の類似点という観点から論じている。

外務省に入りスペイン語を研修したのを皮切りに、スペイン、アルゼンチン、イタリア等に在勤、パラグアイ、コロンビア大使を経て退官した著者がスペインと中南米のつながりを理解するためにと、体験と交友等による知見から知り得た様々なテーマを縦横に綴った平易なエッセイ風の評論集。

〔桜井 敏浩〕